

# 樹木と絵画の交差点

## 第10回 ～速水御舟とツバキ～



速水御舟（1894-1935）は、近代日本画を代表する画家です。代表作の「炎舞」（1925年）は1977年、昭和期の美術品として初めての文化財指定となった作品です。燃えさかる炎に群がる蛾の群れ。漆黒の闇に浮かび上がった光景は鮮烈でありながら、どこか幻のように儚く神秘的です。

御舟は常に“真の美とは何か”と問い続けました。若いころは伝統に習い、模写や自然観察に裏付けされた確かな描写と豊かな色感で作品を描き、その後も新しい画境を求めて制作に邁進しました。後期の代表作、<sup>めいじゅちりつばき</sup>「名樹散椿」について、そのモチーフに選んだツバキに込められた思いを探っていきましょう。

### 速水御舟（1894-1935）

「炎舞」（1925年） 山種美術館蔵 重要文化財

近代日本画草創期の巨匠。新しい時代の新しい美、“欺瞞のない、真実の美”を求めた。40年の短い生涯に数多くの名作を残した。

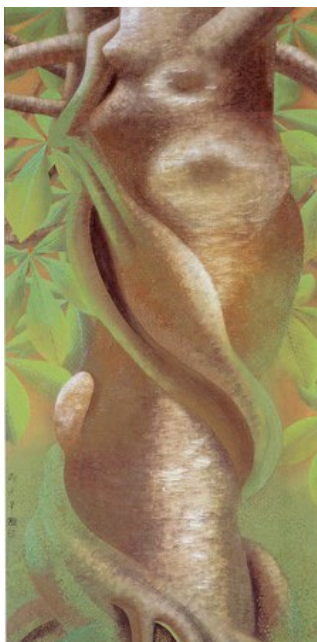
## 美醜をこえた真の美を求めて

「美を確実に知ろうとするには、その反対の醜を充分に知る必要がある」（『速水御舟画論』より以下〈G〉）。明治末期に活動を始めた御舟は、新しい時代にふさわしい美術を模索しました。西洋絵画にも目を向け、ゴッホやロートレックの描いた娼婦の絵に触発を受けて「京の舞妓」（右図）を描きました。

「細やかな肌に真ッ白な白粉が塗られているが、その陰、その奥にはこうした真実がある、と云う様なものを描いてみたい」（〈G〉）。



京の舞妓（1920年）  
東京国立博物館蔵



樹木（1925年）  
霊友会妙一記念館蔵

写実の限界に挑むような執拗な細密描写は画面の隅々、畳の目にまで及びます。そこには観衆が望むような舞妓の美しさは見当たりません。今では御舟の代表作のひとつにあげられるこの作品ですが、発表当時は人々の困惑を呼ぶ問題作として、酷評を浴びました。

代表作「炎舞」（上図）と同じ時期に描かれた「樹木」（左図）は、軽井沢の別荘近くの林のブナをもとに描かれました。幹が女性の体のようにも見えます。よく樹木の幹や枝が人体に見えることがありますが、この絵はおおらかな生命を暗示させつつ画面の中に写実と象徴が調和していて、御舟の観察に裏付けされた豊かな感性を感じます。

「樹木」「炎舞」の2作品をよく見比べてみると「樹木」のねじれた幹と、「炎舞」の赤く渦巻く炎の造形が同じ発想の構図であることがわかります。表現を全く変えながらも真を見つめようとする御舟の真摯な制作態度がうかがえます。

## 伝説のツバキに託した美



御舟は多くの写生を残しました。御舟にとって写生とは、観察して描く行為を通して自身の感情や感覚を発見していく重要な手段でした。植物や樹木ひとつひとつが発露する生命感に崇高さを感じながら描く、写生の意義について、晩年こう語っています。

「一つの花の写生を克明にしてみても、はじめて、かかる微少なものにさえ、深い美が蔵されていることを発見してひそかに感嘆した。げに絵画こそは、概念からいつるものにあらずして、認識の深奥から情熱が燃えあがって、はじめて造り得られる永遠に美しき生命の花であろう」(G)。

木蓮の花弁は墨色の濃淡で表現され、背景は淡い陰影のぼかしで空間を暗示しています。写生を踏まえた丁寧な描写、計算された配置は見事です。色付きの木蓮の写生も残されていますが、この本画（作品）は色を加えずに墨の濃淡のみで完成させており、より鮮烈にみずみずしい生命感、春の息吹を伝えます。

### 木蓮（春園麗華）

(1926年)

岡田美術館蔵

そのような数々の習作を経て、「名樹散椿」の着想を得ます。豊臣秀吉ゆかりの名樹である、京都の椿寺の五色椿（品種名：ごしきやえちりつばき五色八重散椿）を描きました。名樹にはそう言われるだけの崇高さや威厳があるので、それを描写することは単なる花鳥風月や自然の描写とは違う、より深奥なものを展開できるだろうと御舟は考えたのでした。様々ないわれを持つ名樹と御舟が対峙し、自らの持つ技術と感性を十分に発揮した作品と言えるでしょう。



### 名樹散椿

(1929年)

山種美術館蔵  
重要文化財

二曲一双の屏風絵。地表に大きく枝を伸ばすツバキの特徴を捉え、屏風の横画面に巧みに構成しています。五色八重散椿は白・紅・桃色・紅白絞りなどの花色が出る華やかな品種。この品種は普通のツバキのように花ごと散るのではなく、花びらが一片一片はらはらと落ちるのが特徴です。御舟はその風情を美しく効果的に画面に活かしました。重厚な金色の地と相まって、名木の豪奢な存在感が浮きたつようです。御舟は制作のために何日も京都に写生に通いましたが、東京の自宅の庭にも五色椿を植えており、そちらも参考にしたようです。



## ツバキについて



ヤブツバキ開花の様子  
撮影場所：小石川植物園（東京都文京区）

御舟が描いたツバキは、京都北区にある昆陽山地蔵院（通称：椿寺）の古木で、樹高 4m、幹周 1.45m、枝張 29mほどの大木。御舟が描いたころは樹齢 400 年程であったと言われています。1589 年（天正 17 年）、加藤清正が文禄・慶長の役の折りに朝鮮から持ち帰って豊臣秀吉に献上したといういわれのある木です。ツバキ脇には「忠臣蔵」に登場する天野屋利兵衛の墓があり、昔も人気の名所だったようです。御舟はのちの随筆で、椿寺での写生中は絶えず参詣者が訪れる人気ぶりだったことを記しています。この木は枯損して今はないのが残念ですが、現在 2 代目が同じ場所に植えられて、今も開花時期には観光客で賑わいます。

を記しています。この木は枯損して今はないのが残念ですが、現在 2 代目が同じ場所に植えられて、今も開花時期には観光客で賑わいます。

ツバキ（ヤブツバキ）（*Camelia japonica*）はツバキ科ツバキ属の常緑樹です。ツバキ属の原産は日本を含むアジア東南部。日本では室町時代以降、茶の湯の発展とともにツバキが愛好され、江戸時代には多くの品種がつくりだされました。日本原産のヤブツバキから生まれた栽培品種は、耐寒性に優れ、花形が豊富で、世界のツバキ栽培の中心的な位置を占めています。栽培品種は急激に増えて複雑化していて、花の形もさまざまに分類されます。

### ツバキの花形 ピックアップ

#### 一重グループ



ヤブツバキ：ラッパ咲き



ユキツバキ：平開咲き



胡蝶侘助：猪口咲き

#### 八重グループ



乙女：千重咲き



光源氏：牡丹咲き



ト半：唐子咲き

《引用文献》

速水御舟著「絵画の真生命 一速水御舟 画論一」中央公論美術出版 1996年 p.7、p.31、p.32、p.223、p.234

《参考文献》

谷川徹三、河北倫明監修 河北倫明、弦田平八郎執筆「現代日本の美術 第3巻 速水御舟」集英社 1977年

尾崎正明監修 尾崎正明、古田亮、鶴見香織、吉田春彦執筆「もっと知りたい速水御舟－生涯と作品」東京美術 2009年（アート・ビギナーズ・コレクション）

別冊太陽編集部「速水御舟 日本画を「破壊」する」平凡社 2009年（別冊太陽 日本のこころ 161）

桐野秋豊著「色分け花図鑑 椿」学習研究社 2009年

桐野秋豊、箱田直紀著「NHK 趣味の園芸 よくわかる栽培 12か月 ツバキ、サザンカ」日本放送出版協会 2004年